

第3回大伴家持文学賞受賞者について

【受賞者】 Jean-Luc Steinmetz (ジャン＝リュック・ステンメッツ)
ナント大学名誉教授、82歳、フランス出身
主要著書『Et Pendant ce temps-là... (そしてその間に)』
(Le Castor Astral、2013年)



(プロフィール)

1940年トゥール市の生まれ。ナント大学名誉教授。15歳のころから詩を書きはじめ、『交差するこだま』L'Écho traversé (1968年)、『朝への自在な落下』Chute libre dans le matin (1994年)、『そしてその間に／十月の日本』Et pendant ce temps-là, suivi de Japon d'octobre (2013年)、『黙示録のほうへ』Vers l'Apocalypse (2022年)など、15冊ほどの詩集を上梓している。「十月の日本」は、東北大震災の7カ月後に、日本学術振興会の招きで清子(きよこ)夫人とともに訪れた傷痕深い日本の極私的スケッチであるが、また長年育んできた日本のイメージの表現でもある。

2008年、『外観は虎斑めいて』Le Jeu tigré des apparences でアカデミー・フランセーズの「ポール・ヴェルレーヌ賞」を受賞、またその時点での詩業全体に対して「文人協会詩歌大賞」を授与された。多数の評論、旅行記を著しているほか重要詩人の伝記の著者としても知られ、1991年『アルチュール・ランボー伝、不在と現前のはざままで』(邦訳1999年)でアカデミー・フランセーズ賞を受賞、また1998年、『ステファヌ・マラルメ、絶対と日々』(邦訳2004年)で道徳政治アカデミーから「ピエール＝ジョルジュ・カステックス賞」を、アカデミー・フランセーズから「アンリ・モンドール賞」を授与された。これまでに数度来日し、そのつど日本の主要大学で一連の講演を行なっている。

(選考理由)

今回、125名(29の国と地域)の候補者の中から、ジャン＝リュック・ステンメッツを選考した。ジャン＝リュック・ステンメッツは、数多くの充実した詩集があり、今日のフランス詩壇を代表する存在である。日本人女性を伴侶とし、日本滞在、日本の美学から受けた靈感を自身の詩の創造の糧としている。そして、その作品は平易かつ密度の濃い言葉で紡がれた結晶であり、第3回の本賞にふさわしいと評価された。